

「親の教育権」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2020年12月1日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(皆川瑞穂氏:ネクストいけでゅ〜池田次世代教育ラボ〜共同代表)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である斎藤絵里佳さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) ネクストいけでゅの活動について

【ゲスト】「ネクストいけでゅ」は、共同代表4人で立ち上げました。私は皆川と申します。よろしくお願ひします。

私たちは安曇野市の無認可保育施設である「野外保育森の子」で出会いました。また、私と佐藤さんは、シュタイナー療育園及びシュタイナー保育園にも子どもを通わせていました。

次に共通点について、4人は全員が移住者です。一番近いところだと白馬、それから東京や横浜から来ています。それから全員が町内小学校に子どもが在籍しています。学校への出席状況はそれぞれで、行き渋りだったり、ほとんど行っていなかったり、普通に行けたりと、それぞれです。

設立は2018年の冬です。この活動を語る上でとても重要な要素となるのですが、私たちは教育に関しては元教員ではなく素人です。こうした点を堂々と発信することが、ある意味この活動の肝だと思っています。保護者が気づく学校の問題や学校の不思議について、色々な人と共有して、知る機会を増やしてアクションをつなげていく必要性を感じ、活動をスタートさせました。今は移住者である私たちの他に、池田生まれ池田育ちの3人の方に相談役をお願いしています。彼女たちが声かけをしてくださることで、少しずつ町内でのイベント参加者が増えてきました。

先程お話した通り、私たちはオルタナティブな保育を選択した保護者です。「野外保育森の子」は穂高有明にあり、このエリアの

野外保育園の総本山的な園です。園舎もなく、雨の日も雪の日も雨具やスキーウェアを着て、外でのアクティビティをこなします。それぞれの保護者にこの教育を選んだ背景がありますが、私は芸術的な想像力や子どもの純粋な想像力を確保したくて、キャラクターを飾り立てられてないということと、五感をフル活用して欲しいという思いがありました。また食事の面で色々こだわりがあったので、理解のある園を探して選びました。

私と佐藤さんはシュタイナー園にも子どもを通わせています。シュタイナー園は子どもの想像力を大切にしている独特の考え方で営まれています。森の子とは異なりますが、両方に共通しているのは、五感を使って感じて子どもに色々なチャレンジをさせてくれるところです。森の子に至っては刃物も火も使って実践させています。それを大人が使い方を教えながら、見守るということをしています。それから、遊びをとっても大切にしているということも共通しています。子どもたちにモデルを示すのではなく、子どもたちが自然に遊びに入ることができるように、大人が配慮している点も共通しています。子どもたちが自分から遊び、学ぶことができるという、子どもを信頼した目線での関わりが、安心感につながるようになります。それからもう一つの共通点、縦割り保育です。年少さんから年長さんまで3学年が混ざってのアクティビティが基本です。一番下も中間も一番上も経験することは、社会を生きる上でも必要な体験だと思います。

私たちが最初に学校について疑問を抱きかけたのは、宿題です。糸山泰造

さんが考案されたどんぐり問題は、宿題の一律性への問題や、12歳までの子どもの遊びの大切さに基づいた放課後の過ごし方が応用力を持った思考に繋がるということを伝えています。この感覚は、野外保育で遊びや個性を大切に環境を求めた私たちにはずっとなじんでいくものだったのですが、「宿題をこんな風にみんな同じするのはなんかおかしいね」と思い始めた頃に、あるお母さんが「宿題は『学年×1+20分』と決められている」と言いました。更に、他のお母さんは「宿題をこなせないなんて、社会に出て会社勤めしてから多くの仕事を渡されたらできなくなってしまう。」と言いました。そこから調べたところ、宿題に関して時間を規定する決まりはありませんでした。先生が慣例として実施していることを、ほとんどの保護者が疑問にも思わないで鵜呑みにしているということが分かりました。

私たちの子どもが大人になる頃、私たち世代と同じ働き方をしている保証はあるのかという議論もありますよね。仕事のほとんどをコンピュータが処理してくれる可能性が圧倒的に高いかもしれない、という未来を思い描くことが、現在の保護者世代には難しいのかもしれないと感じています。

宿題のことで学校の姿勢に疑問を抱き始めた私たちが、入学前に招待される運動会で更に色々な違和感に出会います。入場行進や整列で最初から軍事的な印象を受け、自分たちの子どもの頃と変わらない様子に驚きました。みんなで同じことをして種目も選べない。そんな様子に個性の欠如を感じましたし、男女別の種目ではジェンダーの配慮について疑問を持ちました。また支援が必要な子どもに対しては先生がおんぶ

で走っていて、そういう対応の中には傷ついたと感じる保護者もいますので、合理的配慮の欠如についても感じました。運動会はそもそもどのくらい子どもが参画しているのかという点も気になりました。保護者のためにみんなで揃えているという印象を持ちました。学校の主役は誰なのか、運動会をはじめとしたイベントは誰のためにあるのかと感じました。それは入学後も変わらないままで、入学してからも運動会の時の違和感と同じような不思議にたくさん出会いました。一斉授業が、個別の理解や習得度、進度を考慮されないまま宿題とセットにされていて、それぞれの子どもの育ちに合わせた保育を見てきた私たちにとっては歯がゆさを感じるものでした。廊下を整列して歩く、掃除中は喋ってはいけない、といった謎のルールも子ども自身が窮屈さを感じるようで、家でもよくそのことを嘆くように話しています。

また、社会人から見てジェンダーはどのくらい配慮されているのかと感じることがあります。私たちの頃と比べて呼び方も一律「さん付け」になり、名簿順も男女別でなくてミックスされて、少しずつ進んでいるような感じはありますが、例えばランドセルの色とか着替えの際とか、もしも自分の性に違和感を抱いている子どもがいたら辛いだろうなあ、と感じさせる部分もあります。

それから、一斉授業のあり方は合理的配慮の問題にも影を落とします。本当は通級で授業を受けたい本人やその親は現状に苦しんでいるという話もよく聞きます。

最後に義務教育は無償であるのに色々なことにお金がかかっていることも気になり

ました。運動着が一式上下で1万円ぐらいしますし、制服に至っては3万円ぐらいかかったりすることもあるとあって、学年費は毎月一人2500円前後、それに給食費など、兄弟姉妹が上に下にいたら更に費用がかかります。

こういった学校の集団的なあり方とか色々な不思議を見つめ直すと、子どもの人権の問題にも繋がってきました。「何でもみんな一緒に」というやり方は、子どもから個性を奪うと同時に横並びから逸れることへの恐怖感を与えて、自分発信で考える力を失っていくことにもなりかねないと危機感を抱くようになりました。それはオルタナティブ保育で保証されていた「あなたはあなたのままでいいんだよ」と言ってもらえるような、子どもたちの安心安全がベースにあることとは正反対のものでした。フィンランドではトイレの時間も自由であることを知り、考えたら排泄のサイクルなんて個人差があっても当然ですよね。それなのに時間で区切られているので、その点についても人権に抵触しているんじゃないかと考えています。先ほどから何度も出ているキーワードの「ジェンダー」も人権と隣り合わせの問題です。学校での自分の性の置き方が定まらないまま心を病んでしまって、その後の人生を狂わせてしまうケースも多々あります。

宿題についてもそれぞれ取り組み方が違うと思うのですが、例えば、保護者が「宿題をさせないことを子どもと相談して決めたのでよろしくお願いします」と担任の先生に伝えたところ、「悪い評価付けるけどいいんですか」と脅しととれる発言をされたケースもあります。

また一昨年に文科省から各学校への通達という形で善処を促されたランドセルの重さの問題ですけれども、今年になってもまだニュースに上がってきています。ランドセルの重さのせいで背骨が湾曲してしまう子どももいます。私も実際に背骨が曲がった一人ですけども、その問題を一昨年の当時小学校1年生の担任の先生にお尋ねしたところ、中学に入ってから荷物の重さに耐えられなくならないように今から準備する必要がある、という回答を得ました。6年後は学びが変わる可能性があるにもかかわらず、見えない未来をなんとなく仮に設定して、子どもに無理をさせているという現状があります。宿題同様、荷物の重さの問題もそれぞれの子どもの育ちや学びによって一律同じことを求めるっていうのはおかしいのではないかなと思うようになりました。

こういった状況を変えられるのは誰でしょう。時々私たちの学びの会にも、先生が変わらないと駄目だと思う、という方が結構な割合でいらっしゃいます。現職の先生ご自身でもそうおっしゃる方には何人もお会いしてきました。しかし先生方は本当に忙しいんですね。先生発信で何かを変えるには、先生たちには色々な負荷が行き過ぎていると考えています。子どもはどうでしょうか。子ども自身で何かを変えられると良いと思いますし、実際にそれを呼びかけている芸能人のSNSも見かけたことがあります。しかし子ども自身で何かを変えるのはなかなか難しいです。なぜなら、子ども自身も忙しくて疲れている現状があるからです。学校も長くて英語の単元も増えてさらに拘束時間は増え、時間たっぷりの分を用意された宿題もあって、更に習い事も部活

もしていたら、何か別のことする時間はないはずですよ。何かがおかしいと思う瞬間すら失われるかもしれないですね。

校長先生はどうでしょうか。実際私たちの活動を通して、様々な校長先生の鶴の一声の大きさを耳にしています。校長先生が学校改革の大きな鍵を握っていることは間違いないと思います。でも本当に校長先生がたった一人で変えられるのでしょうか。

ここまでは現場の声などについて考えてみましたけれども、実際に人事やお金について動かす立場の行政についてはどうでしょうか。池田町では、竹内教育長が大変先進的な教育観を持ちでいらっしゃるの改革に向けた様々な取り組みが進んでいます。しかし行政だけで変わっていくものではないと私たちは思っています。県でも、学びの県づくりフォーラムの連続開催など、様々な取り組みがあることも知っています。文科省も学習指導要領改定の実施とか少人数学級の議論や、改革に向けた様々な動きを見せています。しかしこうした様々な改革の中で若干影が薄いような人たちがいます。それが保護者です。私たちがこの活動を通じて様々な先生方に伺ったお話の中でとても印象的なのは、先生たちは様々なチャレンジをしたがっているし、実際に実行している人もいるということです。しかし、これまで自分が受けてきた教育観を基にそれを全否定してくる保護者が結構な割合にいるということでした。

例えば、宿題をなくすということに関しても、保護者の反発が必至だということも聞きます。保護者は両親だけではなく、両親が勤めている間の放課後に子どもを祖父母に預けている場合があります。この場合は

更にその旧来型の教育観は濃くなりますね。宿題をしないでどうやって時間を過ごせば良いか分からないといった場合などは、宿題をなくす議論になかなか至らないということがあると思います。「子どもの育ちは学びのために遊びがとても大切で、子ども自身の様々な決断力を伸ばすために宿題ではなく帰宅後は子ども自身で考える時間を」と言われてしまっても、何をさせたら良いか分からなくて困ってしまうということがあるのでしょうか。宿題がない場合における学力についての漠然とした不安もあると思います。そして時間つぶしのような目的に基づく宿題に関する議論というのは、子どものためなのか保護者のためなのかが分からなくなっている面があります。

それから不登校については、現状では近隣の公立学校と合わなかったり、様々な事情で追い出されてしまったり、そういう場合に保護者はその子に合うオルタナティブを探してその学費を負担するということが迫られています。義務教育というキーワードは、そのシステムから漏れている子どもは救わず、保護者共々泣き寝入りというのが現実です。そうした方は孤独に陥ってしまう可能性もあります。子どもの行き先も見つからずそこから引きこもりがスタートする場合もあるでしょう。そうした家庭が少しでも減るように、孤独に陥らずうまく伝えるための工夫や連携が今求められていると感じています。

そのためにはまず知ることが大切だと私たちは考えています。子ども目線で個性を損なわないように先進的な取り組みをしている小学校は、なぜそれができているのでしょうか。日本の公立学校でそれができな

い理由はいったい何でしょうか。そういったことを根本的に考えて話し合っ、必要に応じて学校側に働きかけるような動きを保護者がしていくことについての学校変革の可能性は大きいと考えています。

当然ながら私たちは先生の敵ではありません。クレーマーとかモンスターペアレントの匂いを感じるのか、よく誤解されてしまうのですが、それは違います。この活動を通じて本当に様々な先生方に出会えました。どんな先生方にも共通してリアルな声を聞いてきました。授業以外の業務の多さや一向に減らない事務仕事、机の上には山積みの紙資料があると聞いています。何かを変えるのにも減らすことはしないで増えていく一方で、とどめは保護者からクレームです。様々な背景があると思いますが、私たちが会える先生方は本当に色々なチャレンジを試みようとして頑張っている方が多いです。現場発信での新しい取り組みが、色々な意味でアップデートできてない保護者によって潰されてしまうのはもったいないと私たちは考えています。教職員の方々には私たちの存在を、子どもの環境を少しでも良くしていくために共通事項を語るための対話の相手だと思ってほしいです。

こうした様々な学校へのモヤモヤを前に具体的に何かできないかなと思っていた頃に、2018年10月、アメリカの教育ドキュメンタリー映画「Most likely to succeed」の上映会が白馬で開催されました。これは白馬インターナショナルスクール財団理事の草本さん方の主催によるものです。この映画は私たちに様々なヒントを与えてくれました。内容は、監督の小学生の娘が「学校がつまらない」と言っ行ってきたがらなくなるこ

とから始まります。前半は世界的な教育の過去と見えない未来について知ることとなります。その中で、テクノロジーの進化は様々な人間の仕事を奪う一方で、世界では150年以上同じような管理教育を行ってきていて今もほとんどが変わっていないという事実を突きつけられました。続いて舞台となるカリフォルニア州サンディエゴにある「High Tech High」(ハイテク・ハイ、以下HTH)という学校では、プロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)というものが実践されていたようで、日本でアクティブラーニングというようなものですけども、探究的な学びの実践の様子が描かれています。そこでは失敗も織り込み済みで、子どもたちを信じて成長を見守る先生の愛ある姿も描かれていました。先回りして失敗を回避するのではなく、失敗も織り込み済みというところがポイントだと思っています。

一方でHTHではない他の学校の様子として、探究的な学びの在り方に対して以前からの方法を求める子どもたちの様子も描かれていました。受験に有利な勉強を教えてくださいればもうそれで良いというスタンスも、もちろん存在しています。「Most likely to succeed」の中に、テスト直前の詰め込みで得た知識は9割以上頭の中に残らないというデータもあると言われているのですが、そういったデータを基に、未来志向で新しいチャレンジを取り入れている先生が、そうしたアップデートについていけない生徒さんたちの「昔ながらの学びを」っていう声を前に苦悩の表情を浮かべていました。HTHでは夢中になって子どもたちがプロジェクトに打ち込んで、主人公の2人の生徒はそれぞれに大きな変化を遂げます。どち

らも本当に生き生きと学びに向き合っていて輝いて見えました。そんな子どもたちを前に保護者は複雑ですね。自分たちが受けてきた教育と全然違う様子で学んでいるからです。教科書もテストも教科ごとの時間割もなく新しいスタイルに不安を覚えながら、主人公の1人サマンサのお母さんは、何かが変わろうとしているからと、感覚的に新しい学びのあり方を受け入れていきます。この言葉は今全ての世界に起きている息吹を表現しています。これは先進的な学びを前にしたHTHの保護者だけじゃなくて、世界的なパラダイムシフトについて把握しきれなくても教育はどこかで追いついて行かねばならない、そういう焦りは日本の公立学校の保護者でも共有できるはずですし、考えるきっかけになるはずです。色々な人に見てほしいなと思います。その流れで、池田町で自主上映会をしたいと思うに至りました。

「Most likely to succeed」と出会った頃、宿題がない教育現場について調べた時にオランダのイエナプラン教育の存在も知りました。イエナカフェというものがありまして、普段公立学校に勤務されている日本の学校の先生が休みの日を削って勉強の場を提供してくださっています。そこにお邪魔して色々な魅力を感じました。宿題については、日本初のイエナプランスクールである大日向小学校の中川綾さんも、放課後は学校以外の場所でしかできないことをする時間だとおっしゃっていました。勉強ならば宿題をやめて学校ですればいいとおっしゃっていて、家庭でやれる遊びなどを大切にしたほうが良いというお考えです。

イエナプラン教育について私たちが一番

「親の教育権」を問い直す

ヒットしたのは、子どもとのフラットな目線を大切にするため、教職員の方々を「先生」と呼ばないで「グループリーダー」と言うようにしていることです。その大人の在り方には衝撃を受けたと同時に、そのまま子どもを信じているということですし、尊重しているということを体現している点で、逆に合理的だなと深く感心して納得しました。学校は小さな社会であるという目線から異年齢学級を取り入れていることも、縦割りが基本のオルタナティブ保育を選択した保護者である私たちには大きく頷くことができる点でした。実社会で同じ学年の人間が揃うことはないですよね。学校がその実施をすることの意味もとても大きいと考えています。一律のテストや宿題で子どもたちを評価しないで、それぞれの進度に合わせた学びのプログラムを組んで、一般的な通知表ではなくそれぞれの子どもの成長をきちんと見届けた評価を与えるシステムにも感動しました。それぞれの子どもには探究学習の後に発表の場が与えられており、保護者はその様子を見ることができません。先ほどの評価についても二者面談ではなく、必ず保護者と子どもとグループリーダーの三者で振り返りをするようになっていけるのも素晴らしいと感じました。グループリーダーと子どもで学期の振り返りをし、それを保護者が聞き必要に応じて意見を出します。そういう子どもの話にきちんと最後まで向き合う姿や保護者の参画のスタイルが徹底しています。イエナプラン教育はメソッドではなくコンセプトですので、部分を抽出して取り入れることもでき、汎用性が高いという話も聞きました。これを公立学校にもエッセンスとして採用できない

だろうかと考える保護者を増やしたくて、私たちが出会った木曽町や四賀村の公立学校の先生に講師をお願いして、池田町でも出張会を開催することにしました。

各種イベントの開催として、私たちは池田町で少しでも多くの仲間を増やすべく様々な企画を打ち上げてきました。連続企画「次世代でつなぐ、池田町の教育」は9回まで実施しています。「Most likely to succeed」の上映会は大小合わせて5回行っています。先ほどのイエナプラン教育の中川綾さんの講演会ですね。これも2019年の夏にありまして、200人ぐらいお越しくださっています。また県の教育委員会の方と先生方をお招きしてシンポジウムも開きました。

イエナカフェ For Kids@池田町では、子ども向けのイベントを行いました。子どもだけが参加できるイベントで、サークル対話とってお互いに顔を見合わせながら話を深める時間を設けています。

その他の活動として、今年の7月に「ネクストいけでゆ子どもがまんなか構想」と題しまして、対話プロジェクトと実践プロジェクトの2つの方向性でアクションを展開していくことを掲げました。対話プロジェクトは主に校長先生を中心に対話を深めていくことを目的としています。私たちが求める個別最適の実現可能性を探るという意味でも、学校に理解を求める必要なアクションだと思っています。実践プロジェクトはまだ池田町には第三の居場所がないので、いけでゆ発信で何か具現化できないか模索するプロジェクトです。

他には昨年政府が決めた保育料無償化制度について、その枠から漏れた無認可保育施設の野外保育園や幼稚園などが存続の危

機に陥りました。そういった中、各自治体は補助の制度を独自に設けたのに対して、池田町はその部分が遅れていたこともあったので、請願活動を通してその必要性を訴えて制度化までこぎつけたということもありました。この活動について一番重要なのは、実は町内の当該保護者のほとんどが教育委員会を怒ったり慌てて勤務実績を作ったり、その抜け道を使って個別に補助を得ようとしていたりしたんですけれども、同じく当事者である共同代表の安倍さんが「将来的にも今きちんと決めておくことは大事だから請願で進めたい」と決断したことです。

きちんと正攻法を使って後ろに続く人たちに道を作っていくことを示した、とても大事な結論だと思っています。テレビでも放送していただいて私たちも傍聴に行っています。

行政との関係性の構築についてですが、池田町にはもともと行政の中に公立学校の校長先生だった方がいらして、学校の様々な問題に目を向けて子育てのあり方も含め、多くの町民向けのイベントを行ってきたという実績があります。そうしたイベントには当時の校長先生や園長先生、多くの教育・保育関係の方々に参加されていたので、私たちはその様子を見てこの町は変わりたいのではないかと前向きな期待もしました。メンバーのうちの2人はその行政の方と特別にやり取りがあったこともあり、私たちが設立する時にご相談に行ったりしたこともありました。私たちが活動開始のタイミングで竹内さんが池田の教育長になってくださったことは非常に幸運なことで、市民に理解の深い方が教育行政の長にいてくださることで確実に参画意識につながってい

くと考えています。私たちも総合教育会議への参加を通して町の状況や展望を知るように努め、また教育大綱住民説明会に積極的に参加してたくさん意見を届けました。教育大綱は町と一緒に作り上げたという考えを持っています。教育大綱中には子供達にも意見を聞いているということをご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、きっと意見を聞かれた子どもたちも自分たちの参画意識を感じているのではないかと思います。

それから町主催のイベントです。教育評論家でもある尾木ママの講演会や、弁護士さんから人権に関するお話などがあり、町が主催のイベントにも積極的に参加してレポートをFacebookにあげたりしてきました。私たちのイベントは必ず教育委員会や町に後援を依頼し、協調関係をアピールしています。こうした良好な関係性の構築の中で、町の一部である学校のことを考える当事者意識が芽生えて、それが積極的な参画につながっていくと考えています。

移住者による活動は横の繋がりが様々な壁になっていると実感することが多々あります。PTAに何か相談するにも、まずは人となりを知るといった段階が必要となり、住みにくいと感ずることもありました。私たちは育児や仕事の合間を縫い、少しでも自分の子どもにこの活動の利益が還元されるように急いでいるので、相手が何を言っているかよりも、まず相手が誰かということがとても重視されることは厳しいと感じています。地道に町に馴染んでいくしかないので、コツコツと毎月学びの会というものを実施しています。こちらは町民の方がメインターゲットではありますが、実際には

「親の教育権」を問い直す

近隣の町、安曇野、松川、松本からの参加者が多く、千曲市や東筑摩、それから県外からの参加者の方が来てくださったこともありました。これまでだいたい16回実施しています。現在は池田生まれ池田育ちの相談役の方々の声かけによって、少しずつ町内参加者も増え、嬉しく思っています。

令和2年3月の町長選挙では町長選公開討論会を実施しました。目的は町長になる方に池田町の教育改革を後押ししてほしいという希望もありましたが、どのぐらい真剣に向き合ってくれるかを明らかにしたかったという思いもあります。同時に一番のメインは、町民の方々に啓発的な要素も兼ねていました。例えば、インクルーシブ、個別最適といったキーワードを少しでも馴染みのあるものにするために、候補者の方々への事前アンケートでもそういったことに関する内容を盛り込んで問いかけました。この公開討論会やアンケートについては候補者の方々からもとても感謝され、他にも様々な方面から大変好意的な反響を得ました。今後他の地域でも同じように教育に注目した話題で討論会を行ってもらい、参考にさせていただけたらなと思いました。

それから主に県内の大学生が中心となって活動している「つむぐプロジェクト」という団体活動があるのですが、そこで発行している「いけだいろ」というフリーペーパーに連載もさせて頂いています。

活動への反響については、基本的に私たちはFacebookでの発信が活動のベースとなっているのですが、大体1800人ぐらいのフォロワーの方がいらっしゃいます。Facebookの投稿やイベントで、これまで県内では4カ所ほど私たちの活動から派生し

て上映会などを開始したと聞いています。また県外では福岡で2箇所、広島、京都、北海道などから、私たちの活動理念に共感して自分たちも動き出したいという保護者が集まって学ぶ場の作り方などについてお尋ねがありました。また先日は新潟の市議会議員さんが行政視察としていけでゆの話聞きに来て下さいました。十日町市には保護者同士で学ぶ場が無いということで、作っていくにはどうしたら良いかっていうお話や、私たちが行ってきた請願とか公開討論会などの主権者運動についてもお尋ねがありました。

私たちはイベントやアクションごとに広範囲にプレスリリースを配信します。記者さんの中に私たちの活動に大変な興味を持ってくださる方や、内容の濃い記事を掲載してくださる方もいらっしゃいます。新聞を通しての発信はいけでゆのFacebookではリーチできない層に届くので、いけでゆという団体を超えて、「新しい時代の教育とは」という部分についての啓発的な問いかけの拡散にも繋がっており、且つ団体としての信頼も厚くなるので本当に助かっています。

2020年の初めには知事にもお会いする機会を頂くことができました。移動知事室という取り組みの中で、池田町の保護者との懇談の場を設けてくださりました。

今後の展望についてですが、私たちは3年で辞める予定です。なぜなら、ダラダラとやってしまうと目的が見失われてしまう可能性があるからです。そして私たちも子育て現役世代で子どもの成長に本当は向き合いたいと思っているのですが、活動がハードで負荷が大きく、この活動に続こうと思ってくくださる方がいたとして、その人達に

ずっとやらなければならないというハードルを設定しないで、短期集中で決着をつけるモデルを示したいと思っています。残り時間のない今後の活動の落とし所として取り急ぎ言えることは、校長懇談の実施を確実にさせることです。池田町の校長先生は、先日は軽井沢の風越学園にも視察に行かれていますので、おそらく未来の学び方・学びの在り方についてのビジョンを共有できているのではないかと思います。

小さい声でも、子どものニーズを届けることの大切さをアピールしていけたらと思っています。それからそのニーズを創出し共有する場として、より多くの保護者との対話の場を持つことができたとも考えています。町内外問わずこれからの時代の学校の在り方や子どもの居場所のあり方を広く共有していくことは意味の大きいことだと考えています。具体的などころでは、池田の学校がせめて宿題なし・定期テスト廃止、それから先生という呼び方の見直しは、システムにかかわらずできるのではないかと思います。とにかく子どもとのフラットな関係性の構築を目指して、安心安全の場づくりをしていってほしいです。

池田町には第三の居場所がないので、その方面にも何かしらの動きを作れたら良いなと考えています。これは水面下で検討しているところですが、教育委員会などと連携をとりつつ展開していきたいです。野望にはなりますが、全国的な保護者との繋がりの中で大きく運動を展開させることができれば日本の学校の在り方は変わっていくのではないかと信じているので、何かアクションを起こせたらと思います。

まとめです。私たちはよく何がしたいの

かと聞かれることがありますが、私たちが求めているのは子どもの人権に基づいて一人ひとりが楽しく幸せな学校生活を送れるような環境作りです。〈公立学校をもっと楽しく！〉みんなで考えていきたいと思っています。

(2) 質疑応答

【学生】学校には保護者と学校つなげるPTAがあると思いますが、ネクストいけでゆさんから見て今の段階ではPTAが理想的な働きをできていないと感じたから、こういう活動を始めたのでしょうか。

【ゲスト】私たちの子どもたちは小学1年生から4年生です。PTAは2021年にいけでゆのメンバーも役員の副会長になる予定なので、少しずつ入り込んで行こうかなという感じはありますが、とても答えにくいんですけれども、PTAはどちらかというと学校の言うことを聞く素敵な保護者の方を集める場だと思っています。何か物言う保護者という感じではないですよ。PTAでやろうとは思ってなかったですね。

私たちはニュージーランドの例に感銘を受けました。ニュージーランドではPTAからTを抜いてPAにしています。先生にも時間を返そう、PTAとのいらぬ関わりを無くして先生には先生の時間をあげよう、という動きのようです。そしてPAが何をしているかということ、地域企業とタイアップしてフェンドレイズしているのです。

【学生】「先生」という呼び方をなくすというお話があったと思うのですが、子どもに

とって安心安全な関係作りやフラットな目線が教師として大切だと考えています。その上で子どもにとって安心安全な関係づくり・場づくりは、先生の考え方やアプローチの仕方に関わってくるのかなと思うので、呼び方を変えることも大切だと思うのですが、先生たちの在り方の意識改革が大切なのではないかとも思いましたが、いかがですか。

【ゲスト】そうですね。ご指摘ももっともだなと思いながら聞いていました。確かに先生呼びをやめる・やめないというのは小手先感もなくはないなと感じるかもしれませんが、先生という言葉ハードルに感じてしまうこともあるのではないかと思っています。風越の子どもたちは先生のことをニックネームで呼んでいるそうです。それで子どもたちがすごく楽しそうにしている、初めて会う人であっても怖がらず話しかける子がほとんどだったということでした。先生と言うと一段距離ができるような感じも、例えばニックネームで呼んでいいよと言われる安心感は、子どもにとっては「先生」と少し違うのではないかと思います。

保護者や先生自身にも、「先生」という言葉についてくるイメージや概念がかなり定着している中で、呼び方一つで何ができるという感じもしますが、そこからイメージを崩していくという意味や効果もあるのではないかなという風な感じもしています。

子どもの学びの指導者ではなくて、サポーターとして寄り添いながら子どもたちを支えながら見守っていくというスタイルを私たちはイエナプランや風越の在り方を見て知ったので、「先生」が指導者的な立ち位

置でいるのは少し理想と違うと思います。今公立の学校で取り入れるのは難しいかもしれませんが、上の大人から下の子どもに伝えるという構造の中ではやはり先生という呼び方が生きるとしても、子どもの持っている元々の学びのポテンシャルや子ども自身に委ねるということ、そして大人はそれを下支えするというような上と下の関係性が崩壊するというような目線ですよ。そういう風になっていったらいいなという願いも込めて、そういう部分ももっと先生達で知っていきませんか、という願いも込めた問題提起です。

意欲的に学べる人がたくさんいたら良いなと思っています。勉強できる子じゃなくて、「勉強したい」という土台がより小さい時に根付けば、中学に行っても高校に行っても大学に行っても、基礎の部分があれば自分自身の望みを叶えるために行動できるようになるのではないかと思います。